

会 議 録

会 議 の 名 称	平成29年度第1回弘前城跡本丸石垣修理委員会
開 催 年 月 日	平成29年 6月29日 (木)
開 始 ・ 終 了 時 刻	13時30分 から 15時30分まで
開 催 場 所	弘前市緑の相談所集会室および弘前城跡本丸石垣発掘現場
議 長 等 の 氏 名	田中哲雄 (元文化庁主任文化財調査官)
出 席 者	金森安孝、北垣聰一郎、北野博司、関根達人、千田嘉博、西形達明、福井敏隆、麓和善、柳沢栄司
欠 席 者	なし
事 務 局 職 員 の 職 氏 名	<p>(弘前市都市環境部公園緑地課) 公園緑地課長 (理事兼務)・古川勝、同課弘前城整備活用推進室長・神雅昭、同室総括主査・笹森康司、同室主査・横山幸男、同室主事・今野沙貴子 (記録)、同室主事・福井翔子、同室主事・蔦川貴祥、同室主事・福井流星、同室技師・佐藤光磨、公園緑地課主幹兼事業係長・工藤昭仁</p> <p>(弘前市教育委員会文化財課) 文化財課長・成田正彦、同課主幹兼文化財保護係長・小石川透、同課主幹兼埋蔵文化財係長・岩井浩介、同課津軽歴史文化資料館整備担当主幹・鶴巻秀樹</p>
会 議 の 議 題	<p>(1) 石垣修理について</p> <p>(2) その他</p>
会 議 結 果	<p>(1) 石垣修理について</p> <p>①天守台石垣の構造について、調査成果の整理を進めること。</p> <p>②解体修理範囲北端に残る元禄の石垣について、孕みがないのであれば解体せずに残すよう検討すること。</p> <p>(2) その他</p> <p>①弘前城跡本丸東側石垣は、明治27年(1894)・同29(1896)年と、近代以降2度崩壊している。</p> <p>②天守台石垣に見られるチキリ・ダボの時期決定は、大きな課題。</p>
会 議 資 料 の 名 称	<p>① 平成29年度第1回弘前城跡本丸石垣修理委員会 (パワーポイント)</p> <p>② 平成29年度弘前城跡本丸石垣解体調査状況 要旨</p> <p>③ 図1 弘前城天守台東側解体済範囲 (平成29年6月19日現在)</p> <p>④ 図2 弘前城天守台南側解体済範囲 (平成29年6月19日現在)</p>

	<ul style="list-style-type: none"> ⑤ 図3 弘前城天守台北側・西側解体済範囲（平成29年6月19日現在） ⑥ 図4 弘前城天守台天端石背面と土層断面 ⑦ 図5 大正の積み直し前後の天守台角石の比較（天守台石垣南面） ⑧ 図6 大正の積み直し前後の天守台角石の比較（天守台石垣東面） ⑨ 図7 弘前城跡本丸東側石垣 近代以降の石垣と背面盛土ボーリング結果 ⑩ 図8 栗石サンプル採取位置と粒度等内訳 ⑪ 図9 石材カルテ加工痕分類 ⑫ 図10 天守台天端石解体後平面図 ⑬ 大正4年10月8日付「弘前新聞」「東奥日報」記事 ⑭ 近代の弘前城跡本丸東側石垣の崩壊と修理履歴 要旨・年表 ⑮ 弘前城跡本丸石垣修理に関する修理委員会・発掘調査委員会の開催年間スケジュール（案） ⑯ 弘前城本丸石垣修理の体験イベント開催（案）について ⑰ 弘前城跡本丸石垣修理委員会運営規則
<p>会議内容</p> <p>（発言者、発言内容、審議経過、結論等）</p>	<p>（1）石垣修理について</p> <p>①天守台 （事務局）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石垣の解体には、天守台東側の天端石「イ-4」から着手し、東側天端石・南側天端石・北側天端石の順で解体を進めた。天守台西側の天端石については、基本的に解体せずに残してある。6月23日現在、西側以外の3方向で2～3石目までの解体が終了している。 ・築石の上面・面・下面のいずれかに朱書の認められるものがある。東側では、上から「いノ□」「ろノ□」「はノ□」の順に並ぶ。 ・築石の上面か下面、あるいは両面に5×5×5cmのダボ穴をもつ築石が多く、中には上下の石で互いのダボ穴の位置が一致するものも認められる。天守台南西隅・北東隅では、このダボ穴に棒状の鉛製チキリが残っている。また、築石そのものにホゾやホゾ穴を設けることで、上下の石を連結させている箇所も認められる。 ・天端石だけでなく、2石目にも分銅型のチキリあるいはチキリ穴が確認された。残存しているチキリは、鉛製である。 ・築石の下・背面に、コンクリートが敷設される。厚いところでは、20～30cm程度の厚みとなり、その様相が3石目背

面付近まで続く。

- ・天守台上面の敷石は天端石背面レベルの検出にとどまり、2石目背面から裏込が検出される。栗石は、基本的には人頭大の円礫であるが、中に大型の割石も含む。盛土と裏込の境界には、裏込を押さえる石列が形成される。
- ・天守台石垣背面の盛土は、現段階で以下の2種類に大別される。
 - a. 天守台東・北・南側背面の2～3石目上面までの裏込・盛土層を掘削したが、両者ともにこの深さまで近代以降の遺物を含んでおり、その堆積はさらに下層まで続く。盛土は、礫や黄橙色粘土塊を多く含む黒色系の土で、本丸側から内濠側に流れ込むように堆積する。
 - b. 上述の黒色土の下に黄褐色粘土と礫層の互層が堆積する。後者の盛土は天守台石垣西側の背面に堆積し、現段階で近代以降の遺物の出土は見られない。この互層は、天守台南西角石2・3石目背面に堆積しており、2石目の角石はイカ形の天端石と鉛のダボで連結する。天守台石垣の西端に、文化の石垣が残存している可能性を考えている。
- ・天守台天端のイカ形をした角石については、北東・南東・南西隅の3点を解体した。そのうち、北東隅の石材の面には、ほか2点とは異なる様相の加工が見られ、近代以降のものと思われる。一方で、近代の古写真に写る南西角石と現況の南西角石を比較しても、大きな違いは見られない。古写真からも、天守台西端に文化の石垣が残る可能性が想定される。

(委員会)

- ・天守台については、確実に言える事項と不確実な事項を整理すること。急いで結論を出す必要はない。
- ・ダボやダボ穴のある築石の位置関係を図示すること。
- ・石垣背面のコンクリートについて、コンクリートの流し方や築石との関係性を確認すること。
- ・コンクリートの扱いは、石垣積み直し時に大きな問題となる。
- ・天守台石垣の積み直し案を、3案用意すること。

② 天守台北側（本丸東側石垣一般部）

(事務局)

- ・天守台北側（本丸東側石垣一般部）においては、現在天端石の解体を終えている状況である。昨年度までの調査で確認した通り、本丸東側石垣の解体範囲約100mのうち、南側の約

	<p>73mは近代以降の積み直しである。元禄の築造と推定している石垣は、解体範囲の北端に残存している。両者においては、築石背面の裏込・盛土の様相が明確に異なる。</p> <p>(委員会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元禄の石垣の平面ラインを図示すること。 ・A13 グリッド2石目の背面に検出されている石列の精査を進めること。近世の井戸跡に伴う可能性がある。 ・元禄の石垣は孕んでいないのであれば、解体する必要はない。残す方向で検討すること。 <p>(2) その他</p> <p>(事務局)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・弘前城跡本丸東側石垣における近代の崩壊・修理について、市立図書館所蔵の史料を中心に再度精査した。その結果、本丸東側の石垣は明治 27 年 (1894)・29 年 (1896) と、2 度にわたって崩壊していることが分かった。前者について、当時の公文書によると、明治 27 年 4 月に石垣が 6～7 間ほど崩壊、同年 5 月に第二師団監督部から陸軍大臣あてに石垣修繕の予算執行の伺いが出ている。その後同年 9 月には、第二師団陸軍修築部による石垣修築工事が進行中となっており、翌 28 年 1 月に工事竣功となっている。 <p>(委員会)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・明治 27 年には、陸軍が石垣を積み直している。明治 4 年 (1871) の廃藩置県以降、全国的に軍隊が崩壊した城跡の石垣を修理するようになる。石垣を考える時、明治 4 年の廃藩置県は「近世の終わり」を意味する。 ・天守台石垣で確認されているダボ・チキリは、石垣の解体範囲に関わってくる問題。これらが近代の所産であれば、石垣の解体に問題はない。ダボ・チキリの時期決定は、今後の大きな課題のひとつ。 ・チキリに用いている鉛の成分分析を行うこと。 ・天守台に、近代の改修前の石垣の構造が本当に残っているのかどうか、精査が必要。
<p>その他必要事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・会議の公開、非公開…公開 ・オブザーバー出席等 (大林 J V)

	所長・高橋一、沼田修、蔭川健一、一山隆昌、黒住英司、清水 慎一郎、牟田貴信
--	--